倫理　研究課題　＜源流１０＞

教科書：ｐ　　～　　資料集：ｐ　　～　　ノートｐ　　～

●教父哲学（４世紀）

ローマカトリック教会（初代教皇：ペテロ）の正統教義を整備　　⇔異端（魔女狩り）

（例：三位一体説：父なる神／子なるキリスト／聖霊は、一つ）

※アウグスティヌス（最大の教父）

キリスト教の三元徳の確定：信仰・希望・愛（←パウロ）（＋ギリシア四元徳＝７の徳目）

恩寵（おんちょう・カリスマ）＝教会を通してのみ与えられる神の愛（→教会の権威づけ）

人は、教会を通して恩寵を受け取らなければ、人として生きられない

神への愛＝「カリタス」（チャリティーの語源）

人類の歴史＝「地上の国」と「神の国」との闘い。歴史の終末に神の国が実現

（背景）新プラトン主義（教科書ｐ37）、マニ教（←ゾロアスター教）

●スコラ哲学（13 世紀）

修道院の付属の研究施設で、理性（科学）と信仰（宗教）の調和を図ろうとする学問が発達。

（背景）十字軍の影響で、イスラム経由でヨーロッパにギリシア哲学が流入（教ｐ49）

※トマス＝アクィナス（最大のスコラ哲学者）

アリストテレス哲学の＜形相と質料＞が＜目的と手段＞の関係にもあることを使って、

「神の栄光を明らかにすることが理性の目的」とした　→∴「哲学は神学の侍女」。

★「恩寵の考え方が教会の権威づけになった」のはどうしてだろう？

★「信仰に熱心な科学者」は、なぜ信仰と科学研究が両立するのだろう？